

中世荘園の景観と社会の変化

渡邊, 太祐

<https://hdl.handle.net/2324/1398553>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（比較社会文化）, 論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

論文審査等の結果の要旨

本論文は、中世荘園の内部構造及び民衆生活を明らかにすることを目的とする。前半では室町期の備中国新見庄を素材とし、後半では漆生産の全国的な展開を明らかにする。

まずは荘園に暮らした人々の生活や荘園内部の制度等を分析する（第Ⅰ部及び第Ⅱ部）。たとえば油地新田という用語（田地の地目）を手がかりに、ごま油の生産の実態やその変換（油地新田からの収益による油の確保）の過程を明らかにした。この分野の仕事として画期的な業績といえる。また検注帳等の土地台帳を使って、中世の漆木栽培が、畠地や屋敷等の周囲で行われていた景観を復原した（二章）。これまで不明であった現地生産地における漆生産の方法を具体的に明らかにした（殺生掻きではなく、複数年に亘って行なわれる養生掻きだったことも明らかにされている）。これまで米年貢の視点のみで考えられがちであった中世荘園に、ごま油、漆、和紙などさまざまな生産物を京都に送進するシステムという観点で新しい要素を付加している。

三章では新見庄代官祐清が殺害された事件を扱う。従来の研究では、過酷な年貢徴収を行なった祐清が、荘民に恨まれ、殺害されたとされていたが、再考の結果、事件の真の原因は祐清と荘民との間の対立ではなく、名主豊岡を祐清が成敗し、そのことへの豊岡方による敵討ちとして殺害されたことを明らかにした。過酷な年貢徴収を行なう代官というイメージを修正した。この論文は反響を呼び、異なる観点からの批判的論文がいくつか発表されているが、申請者はそれらの批判論文の持つ欠点も指摘しており、基本的には揺らぐまい。荘園史研究にて大きな波紋を与えた論考で、研究史に残るものと評価できる。

荘園制とは、国家的に編成された土地所有制度である。室町幕府体制が揺らぎ、国家的な保障が失われた後も中世後期に至るまで荘園と荘園領主との関係が維持されることが多かった。そのシステムを明らかにするため、年貢収取に関わる文書の史料学的検討、あるいは現地周辺における武家方勢力の動向など、緻密な作業を通じて分析している。

また、中世における生活水準の向上を課題テーマとしている。具体的に社会構造の変化を捉える新視点を得るべく、第Ⅲ部では、漆器生産という視点から社会構造の変化と民衆生活の向上を分析している。古代末から中世にかけて起こった技術革新（渋下地漆器）によって、古代では貴族層に限られていた漆器の利用が、中世になると庶民にまで広がった。同時に庶民へ漆器を提供する塗師の活動（行商、大量生産）も登場し、流通形態にも変化が見られたことを、実態の解明の中で明らかにする。

本論文は序章、終章を加えて全十三章からなる。緻密な史料分析と先入観にとらわれない斬新な視点によって、新しい荘園像・歴史像を生み出したもので、すでに学界に大きな波紋を与えてきている。オリジナリティーは高く、内容・質とも十二分で、博士（比較社会文化）を授与されるにふさわしい内容を持つと判断した。